

小学校低学年児童におけるグループ遊び場面での仲間との相互作用の行動アセスメント (1)
Behavioral Assessment of Interactions Between First-grade Children and Peers in Group Play○大対香奈子*・藤田昌也*・大竹恵子**・松見淳子***
Kanako OTSUI, Masanari FUJITA, Keiko OTAKE, & Junko TANAKA-MATSUMI(関西学院大学大学院*・東北学院大学**・関西学院大学***)
Kwansei Gakuin University, Tohoku Gakuin University

目的

本研究では、社会的行動を「行動が生じた文脈において、その行動が他者から強化を受ける」場合に適応的であると機能的に定義した。その定義に基づき、幼児期のアセスメントから社会性発達において幼さが見られた小学1年生児童を対象に、小グループでの遊び場面の観察を行った。本研究は、(1)小学校入学時に「幼い」児童の社会的行動の特徴を明らかにすること、(2)「幼い」児童が仲間からの働きかけによって適応的に遊びに参加することができるかを検討することを目的として行った。

方法

対象児 19名の幼稚園年長児に対して、WISC-IIIの単語と積み木の課題、WPPSIの短文復唱、人物描画、サリー・アン課題、対人問題解決課題を個別に行った。これらの課題の得点が生活年齢の水準よりも低い6名をターゲット児、年齢相応の6名を統制児として抽出した。選ばれた12名の幼児が小学校入学後、同じ学級に所属する児童が仲間としてグループ遊びに参加した。

実験デザイン ターゲット児と統制児を独立変数、以下の3つの指標を従属変数とした。①ターゲット児および統制児の遊びへの参加とポジティブな感情表出の評定、②グループ全体の遊びへの参加、ポジティブな感情表出、リーダーシップの有無、③ターゲット児および統制児と仲間との間の相互作用

手続き ターゲット児もしくは統制児1名と仲間6名の7名から成るグループを作成し、おもちゃをグループに1つ与え、10分間遊ぶように教示した。遊び場面の観察は小学校の教室で行い、ビデオで記録した。

観察 訓練された学部学生により、ターゲット児と統制児の遊びへの参加およびポジティブな感情表出は、10秒インターバル記録法でそれぞれ1～3までで評定された(一致率:85.8%、83.6%)。グループ全体の遊びへの参加、ポジティブな感情表出、リーダーシップの有無については、10秒インターバル記録法で0「無」か1「有」で記録した(一致率:91.7%、81.7%、81.7%)。相互作用は、行動の従事者(ターゲット児/統制児か仲間か)、働きかけの対象(特定

の仲間かグループ全体か)、行動の内容(ポジティブかネガティブか)についてコーディングを行った(一致率:89.0%)。

結果

ターゲット児は統制児に比べると仲間へのネガティブな働きかけが多く、仲間からはネガティブに働きかけられることが多かった。仲間からポジティブに働きかけられる児童ほど、遊びへの参加の評定が高かった($r = .78, p < .01$)。また、リーダーシップをとる行動が多く見られるグループほど、ターゲット児/統制児から仲間へ、もしくはその逆のネガティブな働きかけが少なかった(それぞれ $r = -.76, p < .01$; $r = -.75, p < .01$)。

相互作用については、ターゲット児の6名中5名に、ターゲット児のネガティブな働きかけから始まる仲間との間のネガティブな相互作用が有意に多く見られた。また、ターゲット児の4名において、仲間からネガティブに働きかけた場合にポジティブに応答することが有意に少ないことが分かった。一方、統制児は6名中4名において、統制児のポジティブな働きかけから始まる、仲間との間のポジティブな相互作用が有意に多く見られた。ターゲット児の中には1名だけ、ターゲット児に見られた典型的な相互作用のパターンを示しつつも、仲間との相互作用ではポジティブなものが有意に多かった児童がいた。この児童の仲間は、遊び場面で適切にターゲット児にプロンプトや教示を出す行動が多く見られた。

論議

幼い児童は遊び場面での社会的行動においても幼さが確認された。このような児童でも仲間からの適切な働きかけがあれば、適応的に活動に参加することも示唆された。

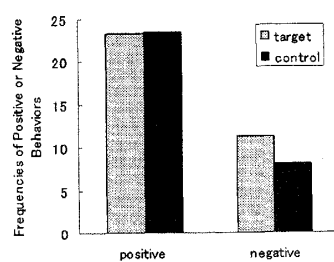


Fig. 1. ターゲット児から仲間への働きかけ

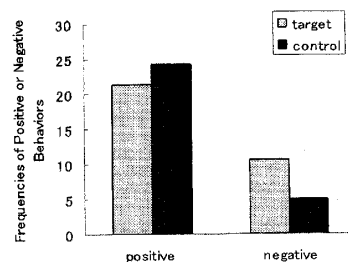


Fig. 2. 仲間からターゲット児/統制児への働きかけ